



TITLE:

# 造園計画の哲学的側面

AUTHOR(S):

中村, 一

---

CITATION:

中村, 一. 造園計画の哲学的側面. 京都大学農学部演習林報告 1965, 37: 190-197

ISSUE DATE:

1965-11-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/191398>

RIGHT:

# 造園計画の哲学的側面

中 村 一

## Philosophical Aspects of Landscape Architectural Planning

Makoto NAKAMURA

### 目 次

要 旨.....	190	3. 「みかけの自然」としての造園材料...	193
1. 問題の領域.....	190	引用文献.....	196
2. 計画の一般理論としての哲学.....	191	Résumé .....	196

### 要 旨

造園計画の哲学的側面は2つの問題に関して顕著にあらわれる。第1に造園が他の物的諸計画（建築、土木など）と協同して有機的生活環境を作り上げるための統一的な理論はないだろうかという問題がある。そのような理論的体系のひとつとして哲学そのものがある。ただしその哲学は科学との明確な相違点を自覚しつつ、しかも科学の諸成果を価値領域にもちこんで、人間の未来を実験的に築いていくための理論を提供するものでなければならない。

第2に専門化した造園計画の特色はなにかという問題がある。その特色は造園が扱う自然的材料にみられるが、ここで自然という言葉の哲学的内容が問題化する。私は自然の本質的特性である安定性と不安定性に注目して、不安定性要因をより多くもつものとして、「みかけの自然」の概念を仮説的に使用することによって造園計画の特色をより深い意味でとらえようと試みた。

### 1 問題の領域

生活環境の物的計画に関する諸技術のなかに建築、土木、都市計画、造園などの分野が専門化しており、それぞれの独自性をもっている。生活環境が拡大し複雑になるにつれて計画の扱う対象や材料について高度の科学的知識が要請されるようになったことが専門化の理由のひとつである。材料に関していえば造園計画の独自性は動植物、自然景観などの「自然的材料」を扱うことにみられる。

しかしながら、専門化がすすむことは計画技術にとってひとつの危険を意味している。なぜならば有機体としての人間を支える環境もまた有機体としての特徴をもっており、環境の各部分の間には有機的つながりがある。環境の一部分の変化は決してその部分だけにとどまらず全体に波及するのである。専門化した計画技術はこの全体的つながりを見失う危険をもつ。生活環境を分割して受けもつ各種専門計画技術はそれぞれの部分についての科学的知識を深めるけれども、それぞれの部分が生活環境全体と関係し合う機能を、または部分が全体に対してもつ役割を、したがってまた各技術相互間の関連性を見失う危険がある。今日、各計画技術間の協力が叫ばれているのはこの危険の裏書きであるともいえる。

専門化の方向とは逆に生活環境全体の統合を指向することは科学の主題であるよりも、むしろ哲学

の主題であると考えられる。そしてひとつの専門化した計画技術は科学的であると共に哲学的であるという二重の性格を帯びざるをえないと考えられる。この問題についての探究が小論の第一の目標となる。

また環境全体に対して各部分の果す役割という観点から、造園の扱う自然的材料はどのような特色をもつのであろうかという問題が第二の目標である。

この探究の方法について私は哲学者ジョン・デューイから多くのことを学びつつある。しかし彼が達した思想の高所にはまだまだ達しえないので、私が自分なりの仮説として提起する「みかけの自然」の概念についてはデューイの考え方と同調しないかも知れず、今後にわたって検討をつづけたい。

## 2 計画の一般理論としての哲学

科学と哲学のはっきりしたちがいは価値に関してとらえられる。科学の理論はその表現において価値概念を含まない。科学の理論は良い、悪い、美しいなどの価値判断を排斥する。それに反して哲学はその思考過程から価値的なものを取り去ることは出来ない。「哲学はそれ自身のなかに価値思考 **value-consideration** を含んでおり、これは科学から区別された哲学の存在にとって欠くことができない故に、哲学はひとつの“実際の”な、すなわち道徳的な機能をもつということを私はいつも主張してきた。またこの要素は固有なものである故に、もし哲学が誤ってその〔道徳的機能の〕存在を確認せず、明らかにしないならば、望ましくない諸性質が哲学のなかにもちこまれ、一方において哲学は純粋に認識的であるという要求を打ち出して科学の競争相手となり、また他方においては哲学が本当に有意義であるかも知れない分野、すなわち諸価値の場における人間活動を指導できるかも知れないということが無視されるようになると私は思っている」とデューイは述べている。

科学と哲学の間には価値に関して明確な相違点があるが、同時にまた両者の間には密接な関係がある。すなわち哲学の主題は「もっとも信頼のおける探究の方法である科学によって得られた結論を人間行動に含まれる価値要因 **value-factors** の上にもちこむこと」<sup>2)</sup>である。科学的方法とその結論は人間の生活を支える価値体系に無関心に宇宙をマクロの方向へもミクロの方向へも限りなく押し広げていくので、人間は新しく拡大された環境に適応するために価値体系を改造していかなければならない。この適応をもっとも包括的かつ知性的な立場から行なうのが哲学であるともいえる。その結果、哲学は絶えず自己の体系を変革していかなければならず、実際に重要な科学上の発見や理論が出現する度に哲学思想は根本的な変改を余儀なくされてきたのであった。

上述したところから哲学と計画の特性を比較すると、そこにすくなくとも2つの類似点があるのに気がつく。1) まず哲学も計画も価値に結びついている。2) また両者は科学的知識に密接に依存している。

これらはたんに類似点であるというだけでなく、哲学と計画の本質的なつながりを示していると考えられるので、このつながりについて検討してみる。

哲学も計画も価値あるいは評価から離れては成立し得ない。それ故、価値あるいは評価とは何かという問いから両者のつながりを探ってみる必要がある。まず価値は人間とその環境との相互作用においてあらわれるものであるから、価値はその性質として相対性をもつ。絶対的、超越的な価値などはない。この前提の下で価値はふたつのあらわれ方をする。ひとつは楽しまれるもの、享受されるものとしての価値であり、美的価値などがこのなかに入る。他のひとつは評価という行為をつうじてあらわれるもので計画に関係が深いのは後者である。結論的にいうと、計画することは未来の価値づけをすることに外ならない。この評価作用は目的・手段関係において特徴的にあらわれる。目的と手段を連続させるとき、換言すれば目的を実現するために手段を選ぶ場合に、その手段の値ぶみとし

ての評価があらわれる。その手段を目的に連続させようとして、その目的が未来に実現されるものであるならば、その目的は目論見 end-in-view であって指向的手段としてはたらく。この目論見はプランであり計画であるから、したがって計画とは評価である。

計画することは未来の価値づけであるならば、哲学と計画の関係は哲学と評価の関係を検討することから端緒がつかめるであろう。すでに述べたように哲学は科学の諸理論を価値の領域に導入することをその中心問題とする。価値から遠ざかることによって獲得された科学の理論を再び価値の領域に引きもどすというのはいかにも奇妙であるが、この奇妙な事情はまさしく人間の運命である。実験によって事物の客観的因果関係を究明するのが科学であり、その結果得られる諸理論は人間の生活に確実性を与え、環境のなかに潜在していたエネルギーを取り出して人間の生活を豊かにしてきた。この限りにおいて科学の進歩が「善い」ことは疑いない。問題となるのはひとつの具体的な科学の発見が善いという判断（価値判断）をすべての人が持つことができない内に科学は次の発見を行なうことである。時代が進むほどに科学の進歩は加速的になり、人々はますますそれについていけなくなる。しかし人間という有機体は価値判断の無い世界に生きては行けないから、ともかくも今まで受け継いできた価値の標準的体系にしがみついて価値判断を行なっていくこととなる。だがこの消極的な立場からは決して科学の進歩が善いとはいえない。もしわれわれが本当に科学の進歩を信ずるならば、われわれは同時に古い価値体系を絶えず改造していかなばならない。この古い価値体系と新しい科学の発見との間の溝を埋めるのが哲学の任務である。

今日、この任務がますます困難になりつつあることは明らかである。コペルニクスが彼の発見を発表した当時、その新しい科学的思想は伝統的、慣習的信仰によって危険だとみなされた。今日では科学の発見そのものが危険とする風潮は殆んどなく、またその危険があったとしても（たとえば水爆の開発を危険と考えた科学者のように）科学者自身が危険を感じず以外に素人には分らない。それほど科学の成果は専門化された知識と複雑な実験装置の上に築かれるのであって、部外者の直観的理解をはばむのである。今日の状況は見方によってはコペルニクスの時代よりも悪いかも知れない。専門化された科学知識は相互に関係づけられることなく、自己運動的にますます特殊化されていく。総合の仕事を行なうべき物的計画においてさえ、建築、土木、都市計画、造園はそれぞれの分野で応用科学的知識を積み重ねることにより相互の理解を困難としつつある。もちろん、このような知識の特殊化の方向は科学の進歩と共に必然的にもたらされたものである。世界が加速度的に拡大されていくのに、一個人の能力が限られているのだから分化は必然的である。しかし、この方向が必然的に「善」であるかどうかは、分化した科学的知識がわれわれの日常の行為から断絶されず、われわれがこれらの知識を手段として価値判断を形成しうるかどうかにかかっている。われわれが前の時代から受け継ぐ、すなわち先行する道徳的標準を科学の知識によって常に作り変えていくことは決して容易ではない。

「というのは道徳家は諸自然科学と、そして、道徳的とみられる行為とのあひだに、つねに明確な一線を劃する。しかしながら一個の道徳（的行為）は、その価値判断を行為の諸成果にもとづいて構成するものであり、最も密接な態度において、道徳は科学の諸結論に依存しなければならぬ。なぜなら、諸変化間の関係こそ先行するものと結果するものとを、我々が結びつけるのを可能にするが、その関係についての知識が即ち科学で「事実上」あるからである。」<sup>3)</sup>

計画の諸技術においても、自然科学の知識はただちに物的技術の開発に結びつけられはするが、人間の行為や価値判断を制御する道徳的標準の形成にはなかなか結びつけられない。したがって計画理論といえば、ほとんどが特殊化された工学的技術の理論のみで、生活環境の創造に関する一般的理論は非常にすくない。しかも、これら数すくない理論（たとえばハーワードの田園都市論やペリーの近隣住区の理論）が百年一日の如く無批判的に信奉され、その原理にもとづいた都市生活環境計画が巾をきかしている。このような計画理論の貧困が今日の都市問題を一そう困難にしているといってもいい



過ぎではあるまい。

ジェーン・ジェコブス女史がハワードの田園都市の流れを汲む現代の都市計画の主流学派に対して痛烈な攻撃を行ない、計画理論の改革を叫んでいるのはむしろ遅すぎた感がないでもない。彼女の意見によれば、ハワードはあたかも19世紀の物理科学者が単純な2変数問題を解析するような態度で都市計画の問題を扱ったのであり、その田園都市の計画概念における主要な2変数は住宅量（又は人口）と仕事の数であった。この2変数は閉鎖した系において単純に関係し合うものと考えられたので、その帰結として住宅量は同じく単純に関係し合ういくつかの補助変数（遊戯場、緑地、学校、コミュニティーセンターなど）をもったのであった。そしてこの単純な2変数関係の基盤の上に、諸都市の人口を再分配し、地方計画を達成する手段としての自己完結的な田園都市理論の全体が築き上げられたのであった。「この孤立した町の計画について何がいわれようとも、2変数関係の単純なシステムの如きものは大都市には決して見出すことができないし——また決してできなかった。たとえ小さな町でも、その町が大都市地域のなかに繰り入れられて多様な選択と複雑に重複した利用 cross-use をもつようになると、このようなシステムは見ることができなくなる。ところがこの事実にも拘らず、計画理論は執念深くこの2変数システムの思考と分析を大都市に適用してきたのであって、今日なお都市計画家や住宅建設者達はひとつのもの（例えば緑地）の比率が直接かつ単純に他のもの（例えば人口）の比率に依存するというような2変数システムの解釈によって大都市の近隣住区を形成しまたは再形成しようと努力しているものであり、その時彼等は扱われるべき問題の性質について貴重な真理の核心を掴んでいると信じ切っているのである。」<sup>4)</sup>

計画の理論への包括的なアプローチのひとつが顕著に哲学的側面をもつことはたびたび繰返してきた。計画家といわれるほどの人ならば誰でも「計画の哲学」を多かれすくなかれもっているはずである。しかしその哲学は古い価値体系の上に築かれたものかも知れないし、また古い科学的知識の上に成り立っているかも知れない。先行的な既製計画理論をうのみにするだけでは計画の哲学をもっているとはいえない。真の哲学的態度は新しい科学的知識を未来の価値の創造のために奉仕させていく過程のなかで形づくられる。それはデューイによれば実験的態度を評価の行為にもちこむことでもある。たとえば、ひとつの公園をつくる場合、それをつくること自体が最終目的であるかのように錯覚しがちであるが、これは実験的態度とはいえない。その公園をつくった結果がどうなったかを重視するのが実験的態度である。「先行的諸対象との一致にもとづいて価値観念および価値判断を形成することから、結果の知識によって指導された享楽対象を構成することへの（立場の）変化は、過去を頼りにすることから、未来を頼りにすることへの変化でもある。」<sup>5)</sup>

未来を頼りにしうるものとするところこそ計画本来の任務である。哲学は計画がその任務を果すために必要な一般理論である。そしてこの一般理論をつうじて造園計画は他の計画諸部門との間に共通の目的（そして手段）を見出し、協調の基盤を築くのである。

### 3 「みかけの自然」としての造園材料

前節でとりあげた問題は造園計画が他の専門化した諸計画技術と協力して有機的な生活環境をつくり上げるための一般理論に関するものであった。そしてそのような一般理論のひとつとして哲学が果たす役割についてみてきた。次にとりあげようとする問題は専門化した造園計画の特色を明らかにすることである。これは造園計画の存在理由を明確にし、他の計画技術との協同を進めるためにも極めて重要なことである。

冒頭で触れたように、造園計画の独自性はそれが扱う「自然的材料」にある。そこで問題となるのが自然という言葉であり、その意味の探究をはじめるとき、造園計画にはもうひとつの哲学的側面が

浮びでてくるのである。常識的には自然が何であるかは一応納得されている。しかし哲学的思惟の対象としての自然は底知れぬ混とんのなかにあり、哲学における混乱の一原因をつくり出している。自然は存在であるというのが哲学上の概ね一致した意見であり、自然とは何かと問うことは存在とは何かと問うことに等しい。

存在は精神であるとするヘーゲルの考え方と存在は物質であるとするマルクス、エンゲルスの考え方は正反対であるが明快な思想の双へきである。両者の立場からすれば「第三の道」などはもっての外とされよう。しかしながら精神といい物質といいどちらも必ずしもよく知られていないのだから、明快な割り切り方にも拘らず、両者の思想も存在についてそれほど明らかにしていない。そもそも存在とは何かという問いかけ自体に間違いがあると考えられる。そのような問いかけは前節で述べたような意味での哲学上の問題を構成しないからである。抽象的な存在一般ではなく、具体的存在は科学によって知られうるのであって、これこそが存在についての最も確実な知識である。そして哲学の中心問題は存在一般を認識することではなく、科学によって知られた存在と楽しまれうる、または評価の対象となる存在との関係を探究することである。したがって、存在そのものではなく、存在の特性について考える方が問題に近い。

おそらく誰の眼にも明らかな存在の特性は「安定性」と「不安定性」のふたつである。万物は流転するというのは否定し難い真理であって、われわれの世界では完全に安定した存在などというものは一寸想像がつかない。と同時に一時的という意味では安定性もまた普遍的である。安定性と不安定性は構造と流動、確実性と不確実性、必然性と偶然性、不連続性と連続性などの対立概念でもおきかえられよう。安定した存在のみが完全な存在であり、不安定な存在は不完全な、存在の仮の姿であるという考え方はギリシヤ時代から今日まで続いている。しかしながら、不安定性が存在の本質的性格であることを理解するのは哲学的計画理論において重要な意味をもつのであって、とりわけ造園計画の特色を明示するために必要である。これを理解するには生活環境一般の計画について考えなければならない。

生活環境を計画していく上での最高の目標は計画された環境において人間がより人間らしく生きのびていけることであろう。換言すれば人間がより知性的に生活できる環境をつくるのが計画一般の最高目標である。では一体、知性的とはどういうことなのか。この点に関して、知性とは問題的事態をよこぶ人間の習性であるというデューイの見解はすぐれている。問題的事態とはすなわち不安定な事態と考えるとよいから、知性的に生きるとは不安定な事態を絶えず生活態度や生活環境のなかにとりこんでいくことである。もちろん知性的環境は不安定性によって特徴づけられている一方、それは十分な安定性をもたねばならない。知性は安定した関係のなかで常に不安定な事態を志向しており、不安定のなかで安定を希求している。安定性と不安定性が適当な頻度で生起することが知性的環境の条件といえる。

安定性と不安定性の関係を比喩的に説明するためにスキー技術をみてみよう。一般にスキー術は上達すればするほど両足をひろげないで滑る姿勢をとるのである。列車の軌道を考えてもわかるように、安定した姿勢という観点のみからいえば、両足をひろげた方が安定度は高いのであって、実際、平滑な直線コースを滑降する場合はその方が適している。しかしスキーのゲレンデは人生と同じく凸凹があるから回転しながら滑っていくことが必要になってくる。そしてその場合には不安定な姿勢そのものが回転に有利な条件になるのである。滑降姿勢のなかに不安定性をもちこむことによってあらゆる状況に対して確実に反応することができる。つまり、転倒を防ぎうるのである。不安定姿勢をとりうるためには当然ながら安定した技術が前提となるのであるが、この技術は決して安定だけを目的とするのではなくて不安定をも目的とするのである。この高等技術をもった滑降者は知性をもった人間にたとえられよう。安定はしているがきまりきった軌道にしか乗らない思考習性をもった人間は、何か

の事件で軌道がゆがめられるともろくも転倒するであろう。彼は自分のスピードをコントロールできないからである。それに反して知性的人間は一見不安なバランスの上に立ちながらも環境の変化に耐えうる態勢をもっている。その態勢は前節で触れた実験的態度につうじるものである。正確な意味での実験は理論に指導されているから結果の予想はできるが、しかし実際に何が起るかかわかない。予想しなかった結果があらわれることはひとつの不安定な事態が生じることである。実験的方法はこの予想しない結果をむしろ歓迎する。既存の理論に合わないからといって実験結果を無視するのは科学的方法そのものの否定である。

不安定な事態を高く評価する実験的習性が知性である。知性は自己の環境のなかに不安定性をみちびくように操作する。知性的環境の計画、人間がより知性的に生きていける環境の計画は確実な科学の理論を基礎として安定した環境の構造を形成すると同時に、不安定な要因を積極的に、しかし制御できる範囲内で、環境に導入することであると考えられる。

さて、造園材料における「自然」という言葉の解釈について前おきのことを述べてきたが、ここで私はひとつの新しい概念を仮説として提出することによって造園材料の「自然」の特色を明らかにしようと思う。それは「みかけの自然」という概念であって、それは次の2つの規定の上に成立する。

1. みかけの自然は不安定性要因をより多くもつ。
2. 不安定性要因をより多くもつことは、必ずしも安定性要因をよりすくなくもつことを意味しない。

みかけの自然という概念は真の自然という概念に対してある。真の自然、または存在の特性として安定性と不安定性がみられることはすでに述べた。存在においてはこれらの特性は偏在するとは考えられない。しかし、いわゆる自然らしいといわれるもの、たとえば造園の材料は多様性、多層性、変化に富むなどによって特色づけられており、このことは不安定、安定の要因が偏在し集中しているという仮説を支持する。しかしみかけの自然においても真の自然と同様に安定性と不安定性は一方が多くなれば一方がすくなくないというような単純な比例関係にはない。たとえば「大自然」といわれるみかけの自然は大いなる変化と共に大いなる安定性をもつ。「みかけの自然」を仮定すれば当然「みかけの人工」の概念が伴う。それは安定性の要因をより多くもつみかけの存在であって、一様性、単層性、固定性によって特色づけられるような人工的材料や施設を指す。

みかけの自然の概念によって造園材料を特色づけるとき、その材料の重要性が一そう明らかとなろう。みかけの自然としての造園の材料は不安定性の要因をより多くもつ故に、知性的環境の創造になくなくてはならぬものである。この仮説をつうじて都市における緑地的環境や自然保全の重要性が本質的に明らかになる。

ただ注意しなければならないことは、みかけの自然そのものが知性的環境ではないということである。みかけの自然は知性的環境が形成されるための一般的な必要条件を示すのであって、その条件下で人間が知性的に生きているか否かは、人間と環境との相互作用、つまり経験によって判断される外はない。しかし、そのような知性的経験が生じるであろうと仮定することはできるのであり、あくまでもこの仮定的な意味においてみかけの自然を理解しなければならない。現実の生活環境においてはみかけの自然は様々な相であらわれるのであって、「内部環境」としての人間の肉体もまたみかけの自然とみなされる。また、みかけの自然とみかけの人工はいろいろな混在度をもってあらわれるのであり、みかけの自然が支配的にあらわれている環境を自然的環境、みかけの人工が支配する環境を人工的環境と名づけるとしても、それは二分法的な区分ではなく、一種の分布密度による分類に近いといえる。都市的環境と緑地的環境、建物と庭などの対立概念も同様に解すべきである。

この対立する環境については観念的な対立関係よりも現実における釣合が知性的環境の創造にとっ

て重要である。いま都市的環境と緑地的環境を例にとってその釣合を眺めてみると、歴史的に緑地的環境が漸減していることは明白である。しかし現代のように緑地の占める割合が加率的に減少している状況では、緑地的環境を保全することはフィード・バック（間違いのない運動方向を維持するために絶えず現在の運動を何等かの標準と比較照査すること）として必要であると考えられる。現代にいたるまでの人類の知性的進歩を肯定するならば、これからの人類が生存しつづけるための条件は過去へのフィード・バックによってたしかめられねばならない。フィード・バックは過去の文化遺産や歴史の教訓に対して為されるだけではなく、過去の文化的（人工的）環境と自然的（緑地的）環境の釣合に対しても為されなければ片手落であろう。人類の発展はたしかに森林→農耕地→都市と景観を変えつつ進んできた。しかしながらその過程において緑地的環境の占める割合は最近まで余り変わらなかったと考えられよう。ところが最近のような都市の爆発的發展がつづけば近い将来にはその割合は驚くほど変わってしまうと予想される。それでも「善い」という結論が現在出ていないとすると、計画者はすべからずフィード・バックの原則によって緑地的環境を保全していく責任がある。その保全にあたって、緑地はもはや建造物や道路のような「構造」のあとに残されるあいまいな土地ではなく、緑地自体が国土の構造として認識されねばならないだろう。

このようなフィード・バックの機能が緑地的環境の保全によって保証される根本的な理由は不安定性要因を多くもつ「みかけの自然」によって知性的生活環境の条件が与えられるからであるというのが小論の結論である。

## 引用文献

- 1) DEWEY, J.: 'Nature in Experience,' compiled in 'On Experience, Nature, and Freedom,' The Library of Liberal Arts, New York p. 253 (1960)
- 2) 同上 p. 254.
- 3) デューイ, ジョン著, 植田清次訳: 確実性の探究, p. 286 春秋社 (1950)
- 4) JACOBS, J.: The Death and Life of Great American Cities, p. 435~436, Random House. (1961)
- 5) 上掲 3) p. 282.

## RÉSUMÉ

There seem to be two important philosophical aspects in landscape architectural planning. One is the problem of cooperation with the other arts of physical planning like architecture, civil engineering, and city planning. Are there any general theories through which those specialized planning arts can find a common way toward making an integrated organic environment? Philosophy, which is distinct from science, can become one of such the general theories of planning, if it bears the conclusions reached in science upon the value factors involved in human action. This is originally the way of thinking urged by John Dewey, and the writer thinks it is particularly important that this idea should be brought into the fields of physical planning in order to co-ordinate their isolated technological theories.

The other aspect appears in regard to the characteristic of landscape architecture. This characteristic is most clearly seen in its use of *natural* materials. But the term Nature has very ambiguous meaning especially when used in an ontological context. The writer, therefore, hypothetically examines two intrinsic traits of Nature—stability and instability (or certainty and uncertainty), and submits a hypothetical conception, 'apparent nature', which has two provisions

as follows ;

- 1) Apparent nature has more instability-factors.
- 2) To have more instabiilty-factors does not mean less stablity-factors.

The instability-factor, as well as the stability-factor, is considered to be neccessary for the development of intellectual environment. Therefore, the materials of landscape architecture in terms of apparent nature are instrumental in the planning of healthy environment for human survival. The term will also be useful for explainning the significance of conservation of natural environments.